東方忍者伝嵐

ハイド

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
東方忍者伝嵐

【Ｎコード】
Ｎ０６８１Ｉ

【作者名】
ハイド

【あらすじ】
新聞記者「弧鴉疾風」は化け物が人を襲う殺人事件を目撃し、瀕死の重傷を負ってしまう。偶然居合わせた紫と霊夢に助け出され幻想入りする。紫に治療兼改造された疾風は鷹の妖怪忍者「嵐」として生まれ変わる！「変身忍者嵐」を土台とした東方二次小説です。

序章

石の森章太郎原作の特撮ドラマ「変身忍者嵐」を土台にした東方二次小説です。
変身忍者を知らない方でも簡単に分かるように執筆したいと思っています。
それではどうぞ。

――――――――
序章

8月下旬、夜の東京。
「はぁっ、はぁっ」
ネオンが光るビルの上をまるで忍者のごとく疾走する青年がいた。
青年の名は「弧鴉　疾風」（こがらす　はやて）東京の新聞社「ＴＯＫＹＯタイムス」の新聞記者兼カメラマンである。何で新聞記者なのに忍者みたいな真似するの？と疑問に思った作者もいるだろう。
何を隠そう彼は、忍者の末裔であり、幼いころから父親に厳しい忍者の修行をやっていた。その忍者の技術をいかして、特ダネを撮ったりとＴＯＫＹＯタイムスではエリートの部類に入る。
・・・・話がそれたので話を元に戻そう。
現在、彼は命を狙われている。
なぜかと言うと、殺人の現場を見てしまったからだ。
話は数分前にさかのぼる。
「ふう・・・これだけネタをメモればいいかな」
その日疾風は、色々な取材をした後、自宅に帰り、原稿を仕上げる

つもりだった。
「仕上げる前に、ちょっとコンビニでジュースでも買ってこようかなっと、やっぱり取材に行った後はのどが渇くからなぁ」
そういって自宅近くのコンビニでジュースを買おうとしたそのときだった。
ぴちゃり・・・・ぴちゃり・・・・
（？猫か犬かが水でも飲んでるのかな？）
なぞの水音を聞いた疾風は、そう考えていた。だが、その考えは次の物音で打ち消されてしまう。
どぐちゃっ！ずぼぁっ！
「！！！」
疾風は音のしたほうに反射的に走った。明らかにちがう。さっきの音は水を飲んでいる音じゃない。この音は刃物で誰かを刺している音だ。
止めなければ。疾風はその一心で走った。
音のしたほうは意外と近かった。そこには、誰かがすでに事切れているだろう女性を引き裂きその肉を喰らっていた。疾風はその光景を呆然と見ていた。疾風は、戦地での取材を経験しており、死体を見るのは慣れっこなのだが、彼の目は、犯人のほうを向いていた。疾風は忍者の技術を父親に叩き込まれておりただの人間ならすぐに取り押さえて警察につきだすことは造作もない。だが、彼は動けなかった。
そう・・・それもそのはず、その犯人は人間ではなかった、ヒヒの化け物だったのである。
化け物は疾風に気がつくといきなり襲い掛かった。
「ガルァァァァァァァァァァァァ！」
ヒヒが腕を振り上げ疾風に殴りかかった。疾風は紙一重でそれをかわす。
「くっ！」
疾風の頬に赤い一筋の線が刻まれ、後ろの照明の鉄柱はヒヒに殴ら

れひしゃげていた。
（まともに戦っては勝てない・・・・逃げるしかない！）
そう考えた、疾風は地面の砂をつかみ投げつけた。投げた砂は運よくヒヒの目にクリーンヒットした、ヒヒがひるんでいるその隙に疾風はきびすをかえし、逃げ出した。

そして現在に至る。

「ふう・・・ここまでくると大丈夫かな・・・・・」
現在、疾風がいるのは東京で一番大きいビルの屋上である。逃げている間にこんなところについてしまったのであった。
「さてと、どうするか・・・・警察に言っても信じてもらえないだろうし・・・写真撮ってくりゃよかったな・・・・。まあとりあえず、どっかに何ヶ月か隠れてほとぼりが冷めたら家に帰ろう。そうと決まれば、編集長にと・・・・・ん」
編集長に欠勤の電話を入れようとした疾風だが、何かの気配を感じた。
それと同時に完全に撒いたはずのヒヒの化け物が姿を現した。
「なん・・・だと・・・・？」
疾風も突然のことにあっけにとられていた。それが命取りとなった。ヒヒが突然、色とりどりの弾を飛ばしてくる。かわそうとするが、避け切れず、何発か当たってしまう。
「ぐっ！」
その時、弾幕をかわすことに気をとられ、ヒヒが肉薄していることに気づかなかった。
しまった！
そう思ったときすでに遅く、疾風はヒヒの爪に身体を貫かれてしまった。
「がっ！」
ヒヒが疾風の身体から爪を引き抜くと同時に疾風が倒れた。

何とか起き上がろうとするが、さっきの攻撃が致命傷になってしまった。自分の周りにたまっている血がそれを物語る。
（畜生・・・・、ここまで・・・・か）
ヒヒはクックッと笑うと疾風の首めがけて爪を振り上げる。
（死ぬ・・・・のか、俺は・・・・冗談・・・・じゃない！動け！・・・・動いてくれ！）
疾風の必死の願いもかなわず化け物の爪が再び疾風を狙い、振り下ろされる。
哀れ・・・疾風はヒヒの爪に首を切断・・・・されてはいなかった。
「夢想封印！」
突然、なぞの声とともに現れたエネルギー玉がヒヒを上半身ごと吹き飛ばした。
疾風は最後の力を振り絞ってエネルギー玉が飛んできた方向を見やる。
そこには赤と白に統一された腋の露出した巫女服を着た少女と、紫色のドレスを着た金髪の少女がいた。
（・・・・だれ・・・・だ）
そこで疾風の意識は途切れた。

第1話「覚醒！我が名は嵐」（前書き）

少しキャラ崩壊、文が意味不明になってるかも・・・

第1話「覚醒！我が名は嵐」

朝起きたら見知らぬ部屋にいた。
「・・・・ここはどこだ・・・・？俺はたしかあのヒヒの化け物に・・・・・」
あれは夢だったのだろうか、しかし、胸の傷跡とその痛みが夢ではないことを照明している。
とそこへガラガラッとふすまが開く。現れたのはあの時助けてくれた腋を露出したあの巫女服の少女であった。
「あら？気がついた？あなたここのところ丸2日ぐらい寝ていたのよ」
「丸2日！？そんなに寝てたのか！？やっべ！編集長にちょっとふけるっていうのわすれてた！！！」
と慌てて外に出、目を丸くする。それもそのはず、目の前の光景はまるで田舎としかいいようのない景色だったからだ。
「ここはどこだ！！！？」
「幻想郷よ。」
「幻想郷・・・・ってあの某弾幕シューティングゲームの舞台か？ってか何で俺ゲームの世界に来ちゃってんだ？」
「それは私がお答えするわ」
「おわぁっ！！」
突然目の前に紫色のドレスを着た少女が現れ、驚く疾風。ふと気づく。
「ここがあの幻想郷ってことはあんた八雲　紫か？」
「正解」
「んじゃあ、あの腋巫・・・（バキィ！）こぶぁ！」
「腋巫女言うな・・・殺すぞ！」
「さ・・・サーセン・・・、今さっき俺殴った奴が博霊　霊夢だろ？」

「そう、博霊　霊夢よ」
「っつーことは・・・・」
結論に達する。
「俺は幻想入りしちまったってこと」
「その通り☆」
「まじでかぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁっ！」
疾風の絶叫が博霊神社にこだました。
「悪い、今すぐ帰してくれ」
「無理、ごめんね」
「は？」
「だってあなた今、妖怪だもの」
「はいいいいいい！？ざけんな！！！」
「どういうことよ紫！？」
説明を求める霊夢と疾風
「実はね・・・、あなたあの化け物に襲われて胸貫かれたでしょ？」
「おう」
「あのとき傷が心臓のところに達して手遅れの状態だったのよ、だから改造して妖怪にしたってわけ」
「なんじゃそりゃぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！元に戻せ！さっさと元に戻せぇぇぇぇぇぇぇぇ！」
紫の胸倉をつかもうとする疾風だがいち早くスキマを展開させもぐりこむ。
「あ！！？コラァァァァァァァ！待ちやがれ！！！」
「ちょっと！紫がどこにいるか分かるの！？」
「知るか！ＫＩＡＩじゃい！」
スキマが閉じたのでダッシュで（どこにいるかわからないが）紫を探そうとする疾風と霊夢であった。
―数十分後―
森の中
「へとへとだ・・・・」

ぐったりと横になってる霊夢と疾風であった。
「腹減ったー、ねー疾風、なんか持ってない」
「ねーよ、自分でもってこいっての」
「しょうがないじゃん、金ないんだし」
とそんなやりとりをしていると
「うわぁーーーーーーー！助けてぇーーーーー！」
子供の声が聞こえてきた。
「子供の声！？」
ダッシュで声のほうにかけよってみる。
「なんだありゃ・・・・」
疾風は驚愕した。なぜなら、漆黒の球体がそこにあったからだ。その球体が子供を食べようとする。
「どうするんだ！霊夢！あの子供食われちまうぞ！！！」
「そんな事言われたって、あの距離じゃ飛んだって無理よ！」
霊夢の言うとおり疾風と霊夢から子供までの距離は５０Ｍくらい。とても間に合いそうにない。
「じゃあ、どうすりゃいいんだ！？あのまま食われるのを黙って見てろってのか！？」
「あんたね、大事なこと忘れてない？妖怪なら５０Ｍぐらい造作もないわよ」
「あ、すっかり忘れてた」
いまさら気づいた。そういえばあのスキマに改造されたっけ。なら、助けられる！
そう考えた疾風は子供に向かって駆け出した。父親に鍛えられた忍者の技と妖怪改造手術があわさった疾風の走力はすさまじく、まさに風のような走りだった。そのまま子供を抱きかかえると木の枝に飛び移り、子供をおろしてあげる。すると漆黒の球体から声がした。
「あとちょいで食べれそうだったのに何で邪魔したの～？」
声とともに球体が消え、一人の少女が現れる。
「女の子！？君は誰だ！？」

「ルーミアだよ～、おにーさんってよく見たらおいしそうだね～、食べてもいい？」
ルーミアと呼ばれた少女はそういうと疾風に向かって弾幕を放ってきた！
疾風は子供を抱え飛び上がり
「霊夢、子供を頼む！」
子供を霊夢に向かって放り投げた。
「え！？ちょっ！！！うわっ！」
霊夢は子供をよろけながらキャッチ！
「霊夢！ここは俺がひきつける！早く逃げろ！！！」
「早く逃げろって・・・・簡単に言ってくれるわね、・・・・簡単だけどね、しっかりつかまってなさい、ボウヤ！」
そういうと子供をおんぶして飛び去る霊夢。
「さてと、ここからは俺が相手だ！来い！」
疾風はルーミアの攻撃に備え構えた！ルーミアが弾幕を再び放つ！
疾風は弾幕をかわす、かわす、かわしまくる！
（しっかし・・・・、我ながらすごい反射神経だな・・・・）
これも紫に改造されたおかげなのだが・・・・。
（だけど・・・避け続けるわけにもいかないな・・・・、攻撃したくても武器がないからなぁ・・・・）
その時だった。いきなり上空にスキマが開き紫が姿を現した。
「何をやっているのかしら？ルーミアごときにてこずって」
「んなこと言われたってどうやって戦ったらいいかわかんねーよ！」
「簡単じゃない、変身すればいいのよ☆」
「はぁ！？」
こんなときになにを言ってんだと言いたかった疾風だったが、言う前に紫がスキマから刀やら手裏剣やらを落としてきた。
「うおわっ！」
弾幕をかわしながら刀等をナイスキャッチをする疾風。
「疾風君、変身するのは簡単よ、刀を持って『吹けよ、嵐、嵐、嵐』

と唱えて刀に振動を加えればいいのよ」
「ずいぶん丁寧な説明だな・・・・」
ルーミアの弾幕が届かないところに行き、刀を構える。気のせいだろうか、疾風の周りを風が荒れ狂うように吹いている。疾風は目をつぶり、先ほど紫に教えてもらった呪文を唱える。
「吹けよ・・・嵐・・・嵐・・・」
目をカッと見開く
「嵐！」
そのとき、刀の振動とともに疾風の周りをどこからともなく羽根が舞い、覆っていく、やがて風がおさまり、疾風の身体は鷹のような身体をした異形の戦士へと姿を変えていた。
「これが・・・俺の姿・・・」
疾風は呆然としている、まあ無理もないだろう。気をとりなおしてルーミアに向き直る。
「おお～強そうなのだ～、だけど最後に勝つのはルーミアなのだ～」
と言いつつルーミアはカードを取り出し、かかげる！
「月符『ムーンライトレイ』」
その時ルーミアの周りに弾幕が現れ、疾風に襲い掛かる。

東方を知らない方だけに説明しよう、このカードはスペルカードといい、いわば必殺技みたいなものである。このカードを使った決闘方法を「スペルカードルール」というのだ。
ゴホン・・・話を元に戻そう。

疾風は弾幕をものともせず、かわし、刀で切り飛ばしながらルーミアに近づく。変身した疾風のスピードは音速を超えていた。手裏剣が届く射程距離に入った。
「はぁっ！」
疾風が手裏剣を投げつける。手裏剣はどういう仕組みなのか分裂し弾幕となる。全弾ルーミアに直撃する。

「きゃっ！」
「とどめだ！」
疾風もどっから入ってたのだろうスペルカードを取り出す。
「忍符『分身手裏剣乱舞』」
疾風がスペルカードをかかげるとともにどこからともなく手裏剣やらクナイやらが飛んでくる。それは全弾ルーミアに命中し、爆炎をあげた。
「うーわー、やーらーれーたー！」
爆炎のなかからルーミアが現れいずこへと飛んでいった。
戦いが終わり変身が解く、すると霊夢が疾風に駆け寄ってきた。
「子供は人里に帰してきたわよ」
「そっか、さんきゅ、へとへとだぜ」
とそこへ紫が降りてくる。
「お疲れ様、最初の戦闘にしてはなかなかの出来ね」
「そりゃどうも」
「あ、そうそうあなたの変身時の名前を考えたんだけどこれはどうかしら」
そういって疾風に紙を渡す。
紙にはこう書かれてあった。『変身忍者嵐』と。
「ありがとよ、この名前はありがたく頂戴するぜ」
こうして幻想郷に一人の戦士が生まれた。
その名は変身忍者嵐！この世に異変があるかぎり、戦え嵐！負けるな嵐！

主人公紹介（前書き）

まことに勝手ながら主人公を紹介させていただきます。続きが気になる人どうもすいません。

主人公紹介

いきなりですが、主人公紹介をさせていただきます。

主人公
弧鴉　疾風

読み
こがらす　はやて

生年月日
１９８９年５月２３日生まれ

種族
元人間　現在妖怪

幻想郷に来た経緯
忍者の家系に生まれた新聞記者兼カメラマンであり取材を終わらせ家に帰ろうとしたとき化け物（おそらく幻想郷から抜け出した妖怪）による襲撃殺人事件を目撃し、自身もその化け物に襲われ致命傷を負う。あわや殺されようかしていた所を化け物を追っていた霊夢と紫に助けられる。その後、心臓に損傷があるため急遽、紫による妖怪改造手術を受け妖怪となる。

主人公が変身した姿
嵐

読み
あらし

説明
疾風が変身したときの姿。変身する場合、「吹けよ嵐、嵐、嵐」と叫び、背中の刀のツバを鳴らす。
変身のメカニズムは刀の振動により脳神経が異常活動を始め、体の細胞配列を変えて、羽根を散らしながら変身する。
また、疾風のときでも身体能力はずば抜けているが、変身するとその能力が3倍アップする。

能力
「忍術を操る程度の能力」

スペルカード（一応登場予定の奴も含める）
忍符『分身手裏剣乱舞』
嵐がはじめて使ったスペルカード。おびただしいほどの手裏剣やクナイ等が敵に向かって放たれる。それだけ。

忍法『嵐旋風斬り』
刀を旋風回転させた後、敵を斬る必殺技。旋風回転を利用して炎や弾幕を消す事も可能。まさに攻防一体のスペルカード

忍法『秘剣影写し』
嵐のとっておきスペルカード。刀身に敵の影を映し、間合いを測って光を浴びせ、錯覚でタイミングを狂わせて斬る必殺技。

武器
忍刀「疾風丸」
嵐に変身するのに必要な刀。特殊な合金「ユックリュウム」でできており、硬度もダイヤモンド並みで磁力にまったく反応しないという優れもの。万が一折れても再生する。

手裏剣、クナイ
嵐が弾幕を張るときに使う。妖力をこめ、放つとと分裂して弾幕になる。

職業
博霊の巫女の従者。つまり霊夢のサポートである。

主人公紹介（後書き）

さて、近々もう一つ小説を書こうと思ってます。
その名も「東方黒飛蝗」（仮）
ゆっくり乞うご期待！！！

第2話「松茸と俺とマルキューと」（前書き）

今回はチルノが出ます。

第2話「松茸と俺とマルキューと」

疾風が幻想入りし2日目の朝・・・。
「ふあ～、眠い・・・」
疾風は霊夢にこき使われ朝飯（献立はご飯、味噌汁そんだけ）を作らされていた。（笑）
「だれだって眠いのよ」
正直きつい！ってか早起きってレベルじゃねーＹＯ！と疾風は思った。
なぜならただいま早朝3時である。早く起きるといってもこれは早すぎだ。
朝飯が出来上がり、霊夢と一緒に飯を食う。
「・・・・味噌汁薄い・・・・」
疾風の素直な感想である。
「薄味が好きなのよ」
「貧乏巫女・・・（ボソリ）」
「何か言った？」
霊夢が殺意のこもった声で囁く。まるでその姿はストリートフ○イターの○鬼その人であった。
「いえ・・・何でもないです」
冷や汗をかきながら否定する疾風であった。
「よー、霊夢。暇潰しに来てやったぜー」
神社の外から声がしたので出てみると、黒と白に統一した明らかに魔法使いですというようなファッションをした少女がいた。
「あら、魔理沙じゃない。どうしたの急に」
「それより霊夢、その男、誰だ？」
魔理沙と呼ばれたその少女は疾風を指差しながら聞いてきた。
「俺か？俺は弧鴉　疾風、霊夢のフィアンセだぐばぁ！」
霊夢の回し蹴りが疾風の首にクリティカルヒットした。

「嘘を言うな、阿呆！」
「サーセンｗｗｗ」
妖怪に改造された疾風は常人よりもダメージの回復が早い。
「うはｗｗｗツンデレだなぁ」
「だまれ、白黒」
「ごめん、冗談です・・・・。ｍ（＿＿）ｍ」
土下座をする魔理沙。ふとおもむろに顔を上げる。
「そういや、お前見たところ外来人だな、お前を含めて２人目だ」
「へえ、俺のほかにもいたんだ、幻想郷入りした人」
「その人は何処にいるの？」
「そいつはアリスの家に居候しているよ」
「へえ、俺もそいつに会ってみたいな」
「そうか、今あいつはアリスと一緒に松茸取りに言ってるよ」
「松茸・・・・、疾風、準備するのよ！」
「はぁ？ってどっから出したんだ？それ！」
松茸と聞いてすばやくキノコ狩り用の道具を持っている霊夢。よっぽど松茸を食いたいのだろう、よだれをだらだらとたらし、目が血走っていた。コワイ・・・・。
「はっはっは、元気だな霊夢は」
のん気なことを言っている魔理沙。
「松茸ちゃ～～～～～～ん！待ってなさいねぇぇぇぇ！！！！」
至極、目を血走らせながら猛スピードで飛び立つ霊夢。
「おーい、待ってくれ霊夢ー！」
追いかける魔理沙。
「・・・」
ため息をつき、疾風は二人の後を追った。

―数分後―森の中
「また迷った・・・、どんだけ方向音痴なんだ俺・・・」
疾風はまた道に迷ってしまった。

「ええい！迷ったってしかたがない！適当だ！適当に行けば良いんだ！！！」
適当って・・・そんなんだから迷うんだよあんたは・・・
「ＤＡ☆ＭＡ☆ＲＥ！作者！！！」
サーセンｗｗｗ
さて、がむしゃらにあっちこっち行くと光が見えた。
「お、出口か？」
抜けてみると、湖でした。残念、無念、また来週ｗｗｗ
「だぁぁぁぁぁぁぁぁ！おちょくんじゃねえ！作者が！」
どうもすいませんでした！（響風）
「しっかし、何処だここ？」
「ここはあたいの縄張りよ！」
背後から声がしたので振り向くと、そこには水色の服を着て、背中に３対の羽がある少女がいた。
「あの・・・誰？」
「あたいはチルノ、さいきょーの妖精よ、ここはあたいの縄張りなんだからさっさとどいてね」
「ああ、縄張りならさっさとここから立ち去るよ、それじゃ」
「ふーん、立ち去らない気なんだ？」
「はぁ！？バカだろお前、ちゃんと立ち去るって言ったじゃねーかよ！」
抗議する疾風だが、バカと言う言葉はこの妖精、チルノ相手には火に油を注ぐようなものである。
「あたいの事をバカって言うなぁー！もう怒った、お前なんか氷漬けにしてやるー！」
そういうと、弾幕を放つチルノ。
「ったく・・・しゃーねーな・・・」
弾幕をかわし、背中に差してある紫からもらった刀「疾風丸」をつかむ。
「吹けよ・・・嵐、嵐、嵐！」

呪文を唱え、鍔をならし、妖怪忍者嵐に姿を変える。
「あっ！お前はルーミアちゃんを虐めた妖怪鳥男！」
「虐めたって人聞きがわりーな！それに俺は鳥男じゃねーっての！」
「もんどうむよー！氷符アイシクルフォール！」
チルノがスペルカードを発動させる！チルノの両翼から氷の弾幕が飛び出し、円を描くように嵐に襲い掛かる！
「ボディががら空きだぜ！」
チルノの懐に飛び込む嵐。あわてて円状の弾幕を放つがジャンプでかわされる！
そのまま飛び蹴りを放つ嵐！
「ぐっ！」
ガードをするもまともに喰らいチルノが吹っ飛ぶ、が体制を立て直す！
「これならどうだ！凍符「パーフェクトフリーズ」！」
あたり一面を細かい弾幕が嵐に向かって降り注ぐ！
だが、慌てず嵐はスペルカードを取り出し、掲げる！
「忍法『嵐旋風斬り』」
そして刀ごと身体を回転させ、弾幕をかき消す！
「そ・・・そんな・・・」
チルノは驚きを隠せない。
だが、まだ嵐の怒涛のラッシュは終わらない。
「止めだ！忍法『秘剣影写し』」
疾風丸の刀身にチルノの影を写し、タイミングを見計らう。
「今だ！」
まばゆい光をチルノに見せる！チルノがひるむ！その隙を見逃さず斬撃をお見舞いする。
「んぎゃっ！」
チルノはまともに喰らい、湖に落ちていった。数秒もかからないうちにチルノが湖から顔を出した。
「あーもー！負けちゃった！」

何故斬られたのに元気なのかと言うと、スペルカードルールつまり弾幕ごっこは競技であり、殺し合いではない。つまり、スペルカードルールに基づいて戦っている場合、弾幕にあたっても、刀で斬られても死ぬことはないのだ。
「大丈夫か？」
心配そうにチルノに駆け寄る嵐。
「大丈夫よ！今回は、びっくりしただけなんだから、次はこうはかないからね！」
と負け台詞を吐きながら飛び去るチルノだった。
チルノが去り、嵐が変身を解き疾風に戻る。そして再び霊夢を探しに森へ入る疾風であった。
だが、再び道に迷い森の中をさまよったのは言うまでもない。

―そのころ、霊夢はというと・・・―
「ヒャッハァァァァァァァァァァァァ！松茸、大量だぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁぁ！」
松茸を狩りまくっていた。

第2話「松茸と俺とマルキューと」（後書き）

いかがでしたか、次回、嵐と光太郎がついに出会う（予定です）！
乞うご期待！

第3話「邂逅！疾風と光太郎」（前書き）

更新が遅れてすいませんでした。

第3話「邂逅！疾風と光太郎」

「ったく、あのバカにかまっていたら日が暮れちまったぜ」
とブツブツ言いながら、疾風は森の中を歩いていた。
ふと、前方に人影がいるのを感じる。
（何だありゃ）
ふと相手がすさまじいオーラを放ち、飛蝗のような姿へと変わって行く。
（一難さってまた一難奴かよ！）
飛蝗は掌をこちらに向けると弾を発射する。
疾風は飛び上がり嵐に変身した。飛蝗の背後へと回る。
（いい度胸じゃねーかよ）
相手に有無を言わさず斬りかかる。飛蝗男は横にステップしかわされる！
（なら、これならどうだ！）
クナイに妖力を注ぎ、弾幕を放つ！弾幕は飛蝗男に直撃したかに見えた。だがしかし見えないバリアのようなものに防がれる。
（何！）
「そんなのは俺には通用しない」
（飛蝗がしゃべった！何なんだこいつは！）
嵐は驚きを隠せなかった。
「こんどはこっちの番だ！」
飛蝗男は掌を嵐に向け、再び超破壊エネルギーを放つ。
するといきなり、無数の弾幕となって嵐に襲い掛かる。
（これはやばいな・・・）
嵐はバックステップをしてかわした。
気づいたら、飛蝗男は飛び上がっている！
弾幕に気をとられているすぎたようだ！
そして落下すると同時に飛蝗特有の脚力を生かし、嵐を蹴りつける！

「ぬぎゃっ！」
吹っ飛ばされ情けない声をあげる嵐。そのまま変身が解け、疾風の姿になる。
「いっててて」
飛蝗男もこちらの変身が解けたことを確認し、人間の姿に戻る。
その姿は疾風と同い年だろうか、だが結構大人びている。
その青年が近づいてくると同時に、上空から声がかかる。
「あれー？疾風、何やってんのそんなところで？」
そういって一人の少女が降りてくる。博霊霊夢だ。疾風は霊夢の声を聞くなり起き上がり、どなった。
「てめぇ霊夢！？どこ行ってやがったんだ！？てめえがどっかいくから道には迷うし！バカに出くわすし！バカに出くわしたおかげで夜にはなるし！腹は減るし！どこの誰だかわからん飛蝗男にぶっ飛ばされるし！散々だぜ！」
「怒らないでよ～。松茸こんなに取れたんだし、今夜は松茸ご飯よ」
といってかごの松茸を見せる。ものすごい量の松茸だ。
「物で釣ろうとするな！」
と言って掴みかかろうとする疾風。
「すまないが・・・・」
頬をかきながら飛蝗だった青年が口を挟む。
「話がよく分からないんだが・・・。君は一体誰なんだ？」
「へ？」
疾風は間の抜けた返事をし、ややあって答える。
「俺の名前は弧鴉　疾風、元人間。生まれは火の国熊本、１９８９年の６月１６日生まれだ。あんたは？」
「俺は南（みなみ）　光太郎（こうたろう）だ」
するとそれを聞くなり疾風は驚いた様子でこっちを見ていた。
「南光太郎・・・って。マジか？！あの南光太郎か！？」
「俺のことを知っているのか？」
「知っているも何も、俺、あんたが出ている番組の大ファンなんだ

よ！」
疾風がいっているのは仮面ライダーＢＬＡＣＫのことである。
光太郎はしばらく考え込んだ後、切り出した。
「もしかして、君はアメリカに住んだことがあるのか？」
疾風は首を横に振りながら答える。
「ちがうよ、俺が言っているのは子供の頃に見た『仮面ライダーＢＬＡＣＫ』のことを言っているんだよ。あんた仮面ライダーＢＬＡＣＫ、南光太郎だろ？」
「えっ！」
光太郎は狼狽した様子だった。
「どういうことだ？俺の番組・・・・仮面ライダーＢＬＡＣＫ？何を言っているんだ・・・」
「その疑問にお答えしてあげましょうか？南光太郎君？」
「「！？」」
何者かの声が聞こえ、疾風の後ろに亀裂が入る。疾風はすばやく後ろを振り向く。
その亀裂が開き、一人の女性が現れる。
「誰だ？」
光太郎が怪訝そうな顔で聞く。
「ああこいつは八雲（やくも）　紫（ゆかり）、通称高性能ばあちゃ・・・ボドラァ！」
言いかけた疾風に回し蹴りを放ち、昏倒させる紫。
「誰がばあちゃんよ」
「サーセンｗｗｗ」
即起き上がり謝る疾風。恐るべき回復力だ。
「さてと・・・、本題に入るわね？」
「あ・・・ああ」
「何で、自分が名乗ったヒーローの名前がＴＶ番組になっているか、聞きたかったのよね」
うなずく光太郎。
「それはね、あなたの世界と彼（疾風）の世界は全く違うってこと。

つまりパラレルワールドなのよ」
「「な、何だってー！」」
驚いて叫んだのは霊夢と疾風で光太郎は叫んではいない。
「パラレルワールドってことなら、何故、俺の名乗った仮面ライダーＢＬＡＣＫがＴＶに出ているのかがうなずける、ただ・・・」
「ただ・・・何？」
「俺が、信彦を・・・魔王を倒したあと・・・世界はどうなったんだ？」
紫はしばらく考え込んだ後、こう答えた。
「それは・・・分からないわね・・・」
「そうか・・・ならいいんだ」
「えーと」
と疾風が話に割り込む。
「さっきから魔王だの何だのってよく分からないんだが・・・・」
光太郎は疾風と霊夢に全てを話した。
秘密結社ゴルゴムに捕らわれ、ニューヨーク地下の研究所から逃げ出した後、仮面ライダーＢｌａｃｋとしての戦いを決意した事。
襲い来る怪人たちと戦い、時には親しかった人さえも手にかけたこと・・・。
そして、１９９９年滅びかけた日本で「魔王」と戦い勝利したこと。
「そんなことが・・・・」
疾風は絶句していた。
「そういうことだ・・・、俺は仮面ライダーとかいう大層なものなんかじゃない。ただの醜い飛蝗男さ」
「光太郎さん・・・、元の世界に帰りたいって、思ったことはないの？」
「ないよ。それにあそこには俺が生を許される場所はどこにもない・・・」
そう言って黙り込む光太郎。霊夢と紫も黙り込んでしまう。
そんな沈黙を打ち破ったのは疾風だった。

「さてと・・・暗い話はもう終わりだ。はやくしないとまた何か来ちまう気がするからな」
と疾風が話を切り上げる。
「今日はもう暗いから博霊神社にとまっていけば？アリスと魔理沙も来ているわよ」
博霊神社は紫のスキマを使い、すぐに着いた。
「お～、光太郎に霊夢、それと疾風まで来ていたのか～」
「あら？私もいるわよ」
そんなこんなで夕食となった。
夕食は松茸ご飯、お吸い物、丸焼き等豪勢だった。
匂いに釣られてか、天狗や鬼等色々な妖怪が集まり、いつの間にか宴会になっていた。
宴会の最中、疾風は光太郎の話を思い出していた。
『俺は仮面ライダーとかいう大層なものなんかじゃない。ただの醜い飛蝗男さ』
（そうかもしれないな・・・・）
光太郎が言うとおり英雄が人々に救いをもたらす存在ならば、彼にその名はあまりに似合わない。
守るためにある筈の腕は、襲い来る怪人を引き裂き、時に親しかった人さえも貫いた。正義の使者の所業ではない。
（だけど・・・光太郎さん・・・）
酒を飲みながら彼は思う。
（それでも・・・あなたは俺の憧れのヒーローです）
と・・・・。

第3話「邂逅！疾風と光太郎」（後書き）

なんとなくシリアスになっているような気がする・・・ｗｗｗ

忍者伝休載のお知らせ

どうもこんにちは、黒飛蝗を書いてますハイドです。
突然ですが、この東方忍者伝嵐を休載したい思います。
理由は、黒飛蝗と忍者伝を交互に書くのは正直きついからです。（自分勝手とは思いますが）
今後は黒飛蝗オンリーで行こうと思っています。
もちろん黒飛蝗本編が終了次第連載再開しようと思いますので。
ご了承ください。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0681i/

東方忍者伝嵐

2010年10月10日16時18分発行